

神功皇后と松浦の地名（1/2）

松浦の地が、また、松浦佐用姫が、なぜに万葉人（万葉集に歌を載せている人々）の憧れの地、また、憧れの人物であったのだろうか。このことの解明には、末盧国、神功皇后、大伴狭手彦、大伴旅人等のことを述べなくてはならない。そこで、これらのことを年代を追って順に述べていくことにする。

■神功皇后と松浦の地名

1. 古代よりあった末盧国（まつろこく）

古く、三世紀239年頃、中国は晋の時代の書物は『魏志倭人伝』がある。その一節にそのころの日本についての記述がある。そこには、「…また、一海を渡る千余里、末盧国に至る。四千余戸有り。山海に沿うて居る。草木茂盛し、行く前に人を見ず。好んで魚鮓（あわび）を捕え、水、深い浅いに関係なく、皆沈没（もぐって）しこれを取る。・・・」と、記してある。それ故、この頃、唐津・東松浦地方が、末盧国と呼ばれていたことは史実である。

2. 「めづらの国」の出現

そして、367年伝承では、神功皇后の朝鮮出兵となる。

『古事記』（712年）によると、仲哀天皇は、九州の熊襲を平定するため、仲哀天皇の8年に、神功皇后とともに軍を率いて九州に下り、筑紫の檀日宮（かしいのみや・福岡市香椎宮）に駐留された。その時、皇后に神が乗り移り、「西の方に国がある。その国は、金銀を始め種々の珍し宝がある。まず、その国を討つがよかろう。」とのお告げがあった。皇后は、そのことを天皇に話されたが、天皇は、それを信じられなかった。そのため、天皇は神の怒りに触れて間もなく檀日宮で亡くなられた。天皇を失った皇后は群臣を集めて西の宝の国を先に討つことを伝え、自ら髪をわけて”みづら”に結い、男装をして神のお告げのまま新羅征伐に向かわれたとある。

～2/2へつづく～

◎エピソード・伝承・うんちく など

■伝承神功皇后の鮎釣り

近くの竹林を釣り竿とし、河の中の石の上に登りて、鉤を投げる。“われ、西の財の国を求めんと欲す。もし、事を成すあらば、河魚、かかれ”と。すると、銀鱗の魚がつかれた。皇后めずらしきものなり、これ時の人その処をなすけて“めずらの国”と云う。今は、訛って松浦と云う。これをもって、この国の女の人は、4月上旬釣りをする。あゆが沢山釣れる。だが、男が釣っても、一向につれない。」と。

■鏡山の名の由来

神功皇后が、新羅への出兵の際、戦勝を祈願された。その時、用いた鏡を山頂に埋められた。それで、それから鏡山と言う。（松浦拾風土記）それから鏡神社（鏡山の麓）ができたと言う。

分野 歴史

地域 全域

◎地図・写真・統計資料など



玉島川の清流

玉島川にすむ珍ら(梅豆羅)しきものが「松浦」の地名の起原というが…………。(玉島川畔より七山方面を望む。)

(『七山村史』より)

◎引用・参考文献（出典）

- ◆『七山村史』P138
- ◆『浜玉町史』
- ◆『唐津市史』
- ◆『鎮西町史』
- ◆『肥前町史』
- ◆『玄海町史』
- ◆『松浦と万葉』清水静男著
- ◆『松浦佐用姫と大伴狭手彦』荻野忠行著
- ◆『九州の萬葉』福田良輔編

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

神功皇后と松浦の地名（2/2）

分野 歴史

地域 全域

◎地図・写真・統計資料など

～1/2からつづく～

しかし、『日本書紀』（720年）によると仲哀天皇は、その後熊襲を征伐されて1年後、なくなられたとあり、皇后も熊襲征伐の後、新羅へ向かわれ、新羅のみならず、高句麗や百済までも皇后の威におそれて服従を誓った、と書かれている。

このように、『記』、『紀』の記述にも相違があり、また、朝鮮側の史料にはこのようなことは、全くない”とのことで、日本側の虚構としている。

神功皇后は、仲哀天皇亡き後、摂政となり、仲哀九年四月、軍を統べて肥前松浦県（まつらあがた）に来られた。皇后の松浦入りの経路については、明らかではないが、この地方の伝えるところによると筑紫より西下し、雷山麓の層増岐野（そそきの）に威をふるう賊酋の羽白熊鷲（はじろくまわし）なる者を討ち、山路を超えて玉島の小川の側に出られたという。そして、この小川において戦勝を占う釣りをされたのである。

このときのことを、『日本書紀』には、皇后戦勝を占って釣を致し、

「・・・銀鱗魚（あゆ）を獲たまいき。時に皇后曰く、希見（めずら）しき物なりと。故れ時の人其の処を号（なずけて梅豆羅（めづら）の国と曰ふ。今松浦と謂うは訛れるなり。・・・」（原漢文）とあり、「梅豆羅」が訛って「松浦」になったという

だが、これは神功皇后とこの地を結びつける伝承であって、神功皇后がこの地へ来る以前、つまり、景行天皇の次の“成務天皇（13代目）の時代に、地方制度として、新しく国造（くにのみやつこ）をおき、矢田稻吉（やたのいなきち）を末羅国造として任命されたが、間もなく松浦県（まつらあがた）と改称されたと言われている。その後、14代仲哀天皇、その摂政の神功皇后と続いていく。

つまり、かつての古代国家の1つ、「末盧国（まつろこく）」（弥生時代の初期）が、大和朝廷の統一国家、中央政府の傘下に組み入れられる過程で、「末羅国（まつらこく）」、「松浦県（まつらあがた）」、「松浦郡（まつらこおり）」と改称されている。

その後、奈良時代に至って、「松浦」の文字があちこちの書物にみられる。『肥前風土記』（713年）や『万葉集』（760年頃）にもみられる。万葉集では、大伴旅人（728年頃）の「遊於松浦河序」となっている。ともかく、「まつ羅」が「まつ浦」と文字がかわるが、名詞としては「マツウラ」であり、一般的に明治の町村制以降、「マツウラ」の呼称となる”

万葉集に「松浦佐用姫（まつらさよひめ）」の登場となるのである。

◎引用・参考文献（出典）

- ◆ 『七山村史』
- ◆ 『浜玉町史』
- ◆ 『唐津市史』
- ◆ 『鎮西町史』
- ◆ 『肥前町史』
- ◆ 『玄海町史』
- ◆ 『松浦と万葉』 清水静男著
- ◆ 『松浦佐用姫と大伴狭手彦』 荻野忠行著
- ◆ 『九州の萬葉』 福田良輔編

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html